

『新・総合政策学部の100冊』 推薦文集

総合政策学部の先生方が学生の皆さんにお勧めする100冊の本（専門書44冊・教養書56冊）の推薦文をまとめました。

専門書(44冊)

～専任の先生方から、ご専門に関係する入門書を推薦いただきました～

1. 田中 克彦『ことばと国家』（牲川先生）

あなたの「母国語」は何ですか。そして「母語」は何ですか。両方とも日本語と答えた人にとって、日本語は、太古の昔から自然に存在してきたものと感じられているかもしれません。しかし、音的なものの連なりが〇〇語と呼ばれるようになるまでには、必ず国家や政治の介入があります。本書は、言語が創られるプロセスを世界の実例から示すものであり、言語と国家権力の関係を考え始めたい人にとって絶好の入門書です。

2. Educational Testing Service, Official Guide to the Toefl Test (Official Guide to the Toefl Ibt) (4 PAP/GDR). (ONO先生)

This book is useful for students who would like advice and practice in preparing for the TOEFL Test. It is specifically designed for TOEFL Internet Based Test (IBT) preparation, however, much of the guidance is also applicable to the TOEFL paper test given to SPS-ELP students. The book features TOEFL test questions, essay topics, full-length essays, tips and exercises for all four language skills (listening, reading, speaking, and writing), an explanation about TOEFL scoring, and essay rater comments.

3. ガロ, カーマイン 井口 耕二【訳】、外村 仁【解説】ステイブ・ジョブズ『驚異のプレゼン 一人々を惹きつける18の法則』（HEFFERNAN先生）

プレゼンテーションのノウハウはこれからの人生で就職活動やビジネスシーンにおいて、自分や自分のアイデアを売り込むためにますます重要になる。しかし、多くの学生のプレゼンスキルは非常に未熟である。この本は、PowerPointスライドの作り方からプレゼンや短いスピーチの構成の仕方を紹介している。近い将来就職活動をする君たちにとってとても力強い味方だ。就活前に慌てて読むのではなく 早速手に取ってほしい。

4. 塩野 七生『海の都の物語〈1～6〉—ヴェネツィア共和国の一千年』（井上先生）

イタリアのヴェネツィアは、今日「水の都」として、あるいは、ルネサンス期に登場する都市国家としてのみ多くの日本人に理解されている。但し、実際にはローマ帝国滅亡後、一千年もの長きにわたって自由と独立を維持した長寿の国家であった。この小さな国が通商と巧みな外交、すなわち人材と智慧をフルに活用し海洋国家として経済的・文化的繁栄を続けた歴史は、今日の日本にとって大きな示唆を与えてくれる。読み物としても面白い。

5. 芳賀 繁『事故がなくなる理由(わけ) —安全対策の落とし穴』(宮川先生)

この本の著者の専門は、産業心理学、交通心理学、人間工学です。現代社会に存在する様々なリスクを例に、安全対策には、人間の心理を考慮することが重要であると述べられています。「おわりに」で、「ちょっと総花的で散漫になったかもしれないと反省している」と書かれていますが、幅広い分野に関わる記述は、この本の長所と言えると思います。この本を読んで、リスク・マネジメントについて考えてみてほしいと思います。

6. 澤田 康幸・上田 路子・松林 哲也『自殺のない社会へ—経済学・政治学からのエビデンスに基づくアプローチ』(大村先生)

自殺は最も悲惨な人の最期である。そうしたいたましい実態を、社会科学の方法論にもとづきながら分析することは、とても難しい。本書は、多様なデータセットを用いた精密な実証分析により、自殺をめぐる諸要因を客観的に提示することに成功している。そうした実証分析の結果は、ともしれば表層的で、前例踏襲的なものに陥りがちな自殺防止対策ではなく、証拠に裏付けられた現実的な処方箋を示すことにもつながっている。実証分析の結果から、難しい社会問題に対する政策的インプリケーションを導く、という手法の面でも、総政の学生の皆さんの参考になるところが大きいはずである。

7. 斎藤 慎『社会起業家—社会責任ビジネスの新しい潮流』(安先生)

本書は現在、世間を賑わせている社会起業家に関して紹介している書物である。社会起業家とは地球環境、貧困、福祉などの諸問題を解決しようとする志の高い考えをもつ人である。こうしたより良い社会を目指して主体的に行動する人は米国社会に多い。したがって、社会起業家の考えや行動は若者が就職などにおいて大企業への安定志向を強めている日本社会においてより重要といえる。

8. 吉岡 斉『原子力の社会史—その日本的展開』(吉野先生)

2011年3月11日の東日本大震災と同時に東京

電力福島第一原子力発電所で起こった「原発震災」。かねてからの警鐘にもかかわらずなぜ事故防止策がとられていなかったのか。政策はどうだったのか。この本では1939年から2011年以後あたりまでの原子力の社会史が明晰に書かれている。「平和のための核」がいつはじまったのか。原子力政策が電力会社と呼应しながらどう変化したのか。著者は東電福島原発における事故調査・検証委員会(政府事故調)委員の一人であった。

9. 伊勢田 哲治『哲学思考トレーニング』(李先生)

本書のタイトルは、『批判的思考入門』あるいは『クリティカルシンキング(critical thinking)入門』とあったほうが良かったか。本書は、読者にまずは疑ってみることを推奨している。膨大な知識・情報を闇雲に鵜呑みにするのではなく、そのなかから妥当な知識・情報を見出す方法を読者に提供してくれる。学際的な学びを要請されるSPSの学生にこそ読んでもらいたい良書である。

10. Fromm, Erich, *Escape from Freedom*. (LAI先生)

This book stimulates everyone to think about his or her relationship, as well as his/her existence, with family, group and society, in the life course of oneself, within a broader development of social and economic changes, towards (but also beyond from) freedom. According to a Google review: If humanity cannot live with the dangers and responsibilities inherent in freedom, it will probably turn to authoritarianism. This is the central idea of *Escape from Freedom*, a landmark work by one of the most distinguished thinkers of our time, and a book that is as timely now as when first published in 1941. Few books have thrown such light upon the forces that shape modern society or penetrated so deeply into the causes of authoritarian systems. If the rise of democracy set some people free, at the same time it gave birth to a society in which the individual feels alienated and dehumanized.

Using the insights of psychoanalysis as probing agents, Fromm's work analyzes the illness of contemporary civilization as witnessed by its willingness to submit to totalitarian rule. It is highly recommended for students to learn about himself/herself in historical change.

11. 鷲田 清一『哲学の使い方』(細見先生)

「哲学」や「倫理学」の授業をしていていつも感じるのは、大学生はこちらの予想に反して、「てつがく」に関心を持っている、でも「てつがく」の初心者にてごらない入門書がない、ということです。「哲学」の歴史も押さえながら、「てつがく」することへと読者を導いてくれ、しかも、読者の日常生活で起こる身近な問題との接点にも配慮した、そういう花も実もある哲学入門書をながらく探していましたのですが、とうとう、あの鷲田先生が書いてくれました。『哲学の使い方』は、使える名著です。

12. ナッシュ, ロデリック F. 松野 弘【訳】『自然の権利—環境論理の文明史』(関根先生)

本書は環境法の世界にも甚大な影響を与えた。従来の人間中心主義的な考え方に対し、生命中心主義のアプローチを唱え、社会の一大変革を予告した。種を超えた倫理の拡大が自然の権利の確立を不可避なものとし、それが宗教、哲学、倫理学、政治学、経済学、社会学、法学など、あらゆる学問分野の変革を促し「緑化」していく現象を、歴史的な必然性として論証を試みる。そのダイナミズムは圧巻といえる。

13. 奥野 克巳・山口 未花子・近藤 社秋『人と動物の人類学』(今井先生)

私たちは、日頃から人間と動物を無意識のうちに区別した言動をとっている。しかし、全ての角度から両者の境界線が明瞭に引けると証明されている訳ではない。本書は、動物を人とは異なる単なる物的存在として認識することに異を唱え、人と動物との間の多様な関係に注目して諸相を描き出し、動物をめぐる現代的な課題を人類学的角度から考えている。

14. Makower, Joel and Pike, Cara, *Strategies for the Green Economy : Opportunities and Challenges in the New World of Business.*

(SRINIVAS 先生)

Businesses are entering the green marketplace to keep pace with demands to reduce their environmental impacts. But greening one's business is no small task in a world gone green. In *Strategies for the New Green Economy*, author Joel Makower provides a clear roadmap for this challenge. The book shows how companies are finding their way within the green economy. The book systematically tackles the central issues of greening a business, including topics such as (1) standards and codes to be green, (2) overcoming consumer, media, and activist distrust, and (3) new opportunities emerging for companies in the green economy.

15. ギャレット, ローリー 山内 一也・大西 正夫・野中 浩一【訳】『カミング・ブレイグー迫りくる病原体の恐怖(上・下)』(安高先生)

人の移動や活動に伴った感染症流行の実態と脅威を描き出すと同時に、アメリカCDCを中心として行われた対策とその限界を伝える記録である。エボラ出血熱やエイズをはじめ、世界各地の感染症が取り上げられているだけでなく、疾病を取り巻く社会・文化的要因、さらには政治的影響や国際関係にまで触れられており、良書としてお勧めする。

16. リフキン, ジェレミー 柴田 裕之【訳】『ヨーロッパ・ドリーム』(朴先生)

自然破壊と経済的な不公正によってアメリカン・ドリームは輝きを失っている。いまやヨーロッパ・ドリームの時代だ。EUは民族国家の枠を超えた地域統合を深め、環境と経済の両立、リスクを伴う科学技術の規制、経済的・社会的な公正、そしてなにより本当に人間的に豊かな社会の実現を追求している。本書は抜群の知識と教養で知られるJ・リフキンが展開する圧倒的な文明論である。日本が参照すべき社会モデルはここにある。

17. ジェイコブズ, ジェイン 中村 達也【訳】
『発展する地域 衰退する地域—地域が自立する
ための経済学』 (長谷川先生)

地域の資源を活用し住民の創意に基づいた輸入置換、つまり地域の外から入ってきた品々を地域内の資源と技術で置き換える活動こそが地域が発展する鍵である。大規模再開発や公共事業、企業誘致に頼るのはもうやめにしよう。都市計画やまちづくりに関心のある諸君は、まず『アメリカ大都市の死と生』を読み、次にアンソニー・フリント『ジェイコブズ対モーゼス』鹿島出版会 2011、その後本書を読むことをお勧めする。

18. 矢作 弘『都市縮小』の時代 (清水先生)

本書はこれまでの拡大する都市計画ではなく、小さな成長や賢い衰退という都市の方向性を示したものである。「はじめに」にも書かれているが「悪戦苦闘している国内外の都市を取り上げ」ている。海外の事例という華やかで成功しているイメージがあるが、本書で扱われている都市はそれぞれに難しい状況を乗り越えてきた背景も示されている。人口が減る、産業が衰退するということが都市にどのような影響を与え、「賢く」対応するとはどのようなことなのかを考えることができる。

19. 藤谷 浩介・NHK広島取材班『里山資本主義—日本経済は「安心の原理」で動く』 (佐山先生)

自然には2種類ある。原生林のように手を加えないで守られるものと里山のように手を加えることで守られるものである。今、日本の里山が危機的状況にある。里山をどうやって守っていくのか？本書には「マネー資本主義」と対極の「里山資本主義」という一貫した思想のもと、それを解決するための事例が多数紹介されている。そしてまた、環境問題解決には、様々な視点からの手立てが必要であることをさり気なく教えてくれている。

20. 松谷 明彦『「人口減少経済」の新しい公式—「縮む世界」の発想とシステム』 (西立野先生)

日本の経済・社会システムは、人口が継続的に増加するという前提に基づいて作り上げられてき

ました。しかし、日本は2005年に人口減少の時代に入りました。本書は、人口減少を前提とした時に、“我々はどのような課題に直面するのか”、“その課題に対してどのように対応すべきなのか”という点について丁寧な議論を展開しています。人口減少が人々の生活をより豊かにする可能性があるという筆者の主張は、傾聴に値すると思います。

21. マクルーハン, マーシャル・カーペンター, エドモンド 大前 正臣・後藤 和彦【訳】『マクルーハン理論—電子メディアの可能性』 (伊佐田先生)

著者のマクルーハンは、メディア研究の草分け的な存在であり、現在でも重要な研究者として位置づけられています。この本は1960年に編集されたものですが、メディアに対する考察は現代も色あせることなく精彩を放っています。メディアを学ぼうと考えている学生諸君には、一度は手にして欲しい本の一つです。メディアが社会の変革を加速させる今こそ、マクルーハンの思想に触れメディアの真髄を探求してみませんか。

22. アトキンソン, デービッド『イギリス人アナリスト 日本の国宝を守る—雇用400万人、GDP8パーセント成長への提言』 (井垣先生)

2020年に開催される東京オリンピックを控え、日本復活のチャンスを迎えている今、日本が何をしたらよいのかを、感情に流されずデータに基づいて提言している。各国の人口やGDPなどの基本的なデータからだけでも、きちんと有益な事柄が見えてくる。アンダーセン・コンサルティング、ソロモン・ブラザーズ、ゴールドマン・サックスを経て、現在、小西美術工藝社社長のアトキンス氏から、その淡々とした科学的データ分析方法を学ぼう。

23. ムロディナウ, レナード 田中 三彦【訳】『たまたま—日常に潜む「偶然」を科学する』 (山田先生)

人生を彩るさまざまな事象や社会現象はどのくらい確率（でたらめ）に依存し、人は偶然をどう意識しているのか。実は世界は「たまたま」に満

ちているかもしれません。そんな世界で私たちは「成功」や「失敗」をどう解釈するべきでしょうか。本書はそんな問いにスター・トレックの脚本を手がけ、大学で確率を講義する著者が、確率と統計の歴史エピソードをまじえて応える本です。本書を通して確率・統計の思考で世の中を解釈する見方を知ってください。

24. Hodges, Andrew, *Alan Turing: the Enigma: The Book That Inspired the Film, the Imitation Game*. (Tijerino 先生)

A biography of Alan Turing, a British mathematician who is also known as the father of computer science and artificial intelligence. This book is a well-written biography of a great man who saved the Allies, during WWII from the Nazis, by decoding the “unbreakable” code of the Enigma machine, the device with which Nazis encoded their secret messages. Alan Turing committed suicide at age 41 after becoming the center of much controversy after being arrested and stripped of well-deserved privileges for being found “guilty” of homosexuality, a crime during his time, despite his scientific genius, which saved innumerable lives.

25. 明石 康・高須 幸雄・野村 彰男・大芝 亮・秋山 信将『日本と国連の50年—オーラルヒストリー』(園田先生)

1956年の日本の国連加盟から50年の節目にあたり、日本を代表して、または国連諸機関の責任者として活躍した方々の講演が収録されています。それぞれの講演に先立ち時代背景の解説があり、講演後の質疑応答も含めて、初心者にもわかりやすく、国際社会への貢献の意義や難しさについて考えるうえで示唆に富んだ一冊です。編著者の一人である高須大使は、総合政策学部のリサーチ・コンソーシアムや国連セミナーでお話してくださいました。

26. 橋本 強司『開発援助と正義』(西野先生)

「国益むき出しの開発援助を正義と言いくる

め、不正と不公平がまかり通る国際社会。真に日本らしい開発援助とは何か？」という問いに答えるため、「なぜ援助が必要なのか?」、「援助における正義とは何か?」、「正義を実現できる具体策は何か?」等の視点から、ダイヤモンド、カント、サンデル、セン等の著書と対話しつつ、長年開発コンサルタントとして活躍してきた経験と学際的知識を織り交ぜ、正義を語る援助哲学書。

27. 秋田 茂『イギリス帝国の歴史』(柴山先生)

好き嫌いはともかく、アメリカが世界のリーダーとして機能しているのが現在とするならば、かつてイギリスは、世界のリーダーとして、300年近く活動してきた。それは、現在の米国とは異なる世界経営のやり方であった。本書は、そのやり方について、アジアに焦点を当てながら、そのエッセンスを的確に論じた好著である。しかも学問的にも、次の段階に進みたい読者にとって、良き入門書となっている。

28. ユヌス, ムハマド 猪熊 弘子【訳】『貧困のない世界を創る』(小西先生)

本書は、グラミン銀行創設者であるユヌス氏が提唱する、ソーシャルビジネスの具体的な展開プロセスをまとめた実践の書であり、優れた啓蒙の書でもある。社会的便益を最大とする目標設定など、大変興味深く、新たなビジネスモデルとして学ぶべきところは多い。環境問題、IT革命、グローバル化など世界の変革の中で、貧困の無い世界の実現に向けて挑戦し続ける著者から、読者は多くの知的刺激を受けるであろう。

29. Bowker, John, *World Religions*. (DECHICCHIS 先生)

Tevis Fen-Kortiyai describes this book as “the most accessible, well-written and even-handed ingle-volume overview of current world religion I’ve ever found in English”, and he goes on to say that he would recommend it “to anyone seeking to get at least a baseline grasp of what our neighbors believe”. It has a magazine-style format with lots of pictures, which is especially helpful for

apanese students, and its text descriptions are generally accurate and well crafted. John Bowker, the author, also wrote The Oxford Dictionary of World Religions, and he edited The Cambridge Illustrated History of Religions.

30. ベルク、オギュスタン 篠田 勝英【訳】『日本の風景・西欧の景観—そして造景の時代』 (客野先生)

ヨーロッパの諸都市を歩いたり、写真を見た時に、なぜ建築や庭園がこんなに日本のものと異なるのだろうか考えたことはないだろうか？筆者は、その理由を、日本人と西洋の人々の間の空間認識や空間造作に対する考え方の違いに求めた。たとえば、西洋の建築や庭園では、遠近法や対称性という幾何学的な美しさが重視される傾向があるのに対して、日本では日本画的な視点とその視点の変化が重視される。そのことが庭園の形態の違いにつながっていると捉えている。東西の庭園や建築など多くの事例が紹介されているので、庭園や建築巡りをする前に読んでおくと、楽しみがますます増すと思う

31. 森岡 正博『生命学をひらく—自分と向きあう「いのち」の思想』 (村瀬先生)

人の生と死、医療問題、人間関係から、宗教、文明論まで、私たちの生命と暮らしをめぐる諸問題を思想・哲学の立場から探究する。「自分を棚上げにしない知の構築」をモットーに、いのちの問題に対する従来の扱い方やありきたりな“正解”に挑む著者の議論から、読者は現代社会とそこに生きる人間に対する新たな視点を示されるであろう。「人間と人間の共生」について学ぶすべての学生に、本書を通じた著者との対話を強くお勧めしたい。

32. サイード、エドワード・W. 今沢 紀子【訳】『オリエンタリズム(上・下)』 (山中先生)

ヨーロッパ世界からみたイスラーム世界の偏ったイメージがどのように形成されたか幅広い文化史の知識にもとづいて明らかにした世界的名著。欧米社会に根深く存在する本質主義的文化観を批

判する。今日のイスラームに対する欧米社会の偏見の源流を理解するためにも必読の書。

33. 岡田 邦雄『ル・コルビュジェの愛したくるま』 (八木先生)

モダニズム建築家として世界的にあまりにも有名なル・コルビュジェとは一体どのような人物だったのか？また、建築家とはどのような生き方なのか・・・これまでに、多くの書籍を通してル・コルビュジェについて紹介されてきているが、本書では住宅は「住むための機械」と言ったコルが「クルマ」を都市の大きな要素として捉えた建築家の創造の軌跡（明晰な思想）に触れることが出来る。実に楽しい書籍である。

34. ジェイコブズ、ジェイン 山形 浩生【訳】『アメリカ大都市の死と生(新版)』 (齊藤先生)

20世紀機械工業の急速な発展により、コントロール不能にまで膨張した都市。混乱する機械文明都市の解決策を、高層ビルと緑の空間の鮮やかな対比として提示したル・コルビュジェ。ル・コルビュジェの都市イメージを、都市の本質を理解しないものと激烈に批判したジェイン・ジェイコブス。本書は都市論の古典として知られるが、これまで推薦できる全訳がなかった。少々厚めの本だが、挑戦してほしい。ル・コルビュジェの都市論に興味がある人には、「輝く都市」(鹿島出版会)を勧める。こちらは、さほどの厚さではない。

35. 上田 篤『日本人とすまい』 (角野先生)

40年以上前に出版されたこの書は、日本住宅の特質について、床や屋根、天井、土間といった要素ごとに、その機能や文化的意味を解きほぐす。内容に古さを感じさせないどころか、すまいの素材や建築技術が進化し、家族形態と生活様式が多様化する今こそ、住宅の未来像を考えるヒントを与えてくれる。歴史学や文化人類学等の視点を踏まえた文章も読みやすく、1974年の日本エッセイストクラブ賞を受賞している。

36. 安藤 忠雄・石山 修武・木下 直之・佐々木 睦朗・水津 牧子【ほか著】『「建築学」の教科書』 (山根先生)

タイトルに「教科書」とあるが、この本は決して堅苦しい専門分野のテキストではない。むしろ建築学という分野の広がり多様性を知り、建築との向き合い方を学べる、いわば「建築を学ぶための教科書」である。14人の著者はそれぞれ、建築設計、建築計画、建築史、建築保存、建築生産、建築環境工学、建築構造、建築評論の領域の最前線で、建築を「面白く」している人たちである。この本からさまざまな建築の可能性を知ることができる。建築士プログラムを志す皆さん、またすでに建築士プログラムを履修している皆さんにぜひ読んでほしい1冊。

37. 服部茂幸『新自由主義の掃蕩—なぜ世界経済は停滞するのか』(坂口先生)

著者によると、世界は成長と繁栄のために新自由主義を実践したが、「99%の国民の賃金・所得を停滞させた」、「1%の富裕層にパイを集中させた」、「家計に返済出来ないカネを貸して支出させた」という破壊的で不公平な結果をもたらした。成長と格差、カジノ資本主義、レモン社会主義、ポスト・ケインズ派などのキーワードに興味がある諸君は是非読まれるとよい。そして、この本の副題である「なぜ世界経済は停滞するのか」という問に対する答えを考えてほしい。

38. 八代尚宏『日本経済論・入門—戦後復興からアベノミクスまで』(長峯先生)

戦後から現在までの日本経済に関する教科書ではあるが、少子化、TPP、アベノミクス、所得格差など、現在の政策課題について一通り読み物的に学ぶことができる。学生には、さまざまな専門科目を学ぶ前に、常識としてぜひ知っておいて欲しい内容であり、レベル的にもやさしく入門書としてまさにお薦めである。

39. 小林 雅一『クラウドからAIへ—アップル、グーグル、フェイスブックの次なる主戦場』(窪田先生)

2012年、Googleの脳神経ネットワークシミュレーターにYouTubeから無作為に抽出した多数の画像を見せたら、人間の顔や体、猫の顔などの概念を自習した。脳を模倣したシステムの開発が本

格化しており、IBMの切手大のチップの場合、2011年の初期プロトタイプは線虫並みの神経細胞数であったが、2014年のものは昆虫並みになった。機械の能力の飛躍的な拡大による大変革が始まりつつある。

40. プラハラード, C. K. スカイライトコンサルティング【訳】『ネクスト・マーケット—「貧困層」を「顧客」に変える次世代ビジネス戦略(増補改訂版)』(古川先生)

ここ数年の間に特に注目されるようになったBOPビジネスについて、経営学的な視点から紹介している書籍。BOPとは何か、なぜこのマーケットに注目する必要があるのか、どのようにして事業に取り組みばいいのかを事例を踏まえて紹介しています。BOPビジネス自体に関心のある方だけでなく、発展途上国支援などに関心のある方もおすすめです。

41. 阿部 彩『子どもの貧困—日本の不公平を考える』(亀田先生)

著者は母子家庭の母親に対するアンケートの回答に触れ次のように訴える。「子供のために早く死にたい」と、母親に言わせる社会は許されるべきではない。」母親と20歳以下の子供だけからなる母子家庭の相対的貧困率は実に66%に上る。相対的貧困率とは著者の計測によると調整された一人当たり所得が127万円以下の世帯である。この「調整された一人当たり所得」というのは世帯あたりの手取り収入を世帯人数の平方根で除した値である。よって、例えば母一人子一人の家庭の3件に2件は手取りの所得が179万円以下だということだ。だから皆さんにこうして欲しいとは言わない。せめて本書を読んで欲しいと願っている。

42. ウェーバー, マックス 中山元【訳】『職業としての政治/職業としての学問』(北原先生)

社会科学の大家マックス・ウェーバーが、第一次世界大戦敗戦前後、革命の雰囲気もある騒然としたドイツにおいて大学生に対し行った情熱を込めた講演録。『政治』は、政治とは何か、政治家に求められるものは何かを論じ、現在でも科学として政治を分析するための教科書だ。『学問』は、学

ぶこと、研究することの意味を明らかにする。いずれも、若者たちに「合理化」の時代に生きることの意味を考えさせ、明晰、誠実、情熱を求める。

4 3. セン, アマルティア 池本幸生【訳】『不平等の再検討—潜在能力と自由』(四方先生)

人と人の不平等をどう定義できるだろうか。所得で測ればいい？国が違えば同じ金額でも買えるモノが違ってくるかもしれない。いや、同じモノが買えたとしてもそれを使うことができなければ意味がない。本書でインドのノーベル賞経済学者アマルティア・センは、選択できる「機能」の範囲についての平等を考えるべきだとする。足が不自由な人は自転車があっても乗れない。重要なのは移動という「機能」を選択できる自由なのである。

4 4. 池田 香代子【再話・文】、マガジンハウス【編】『世界がもし100人の村だったら—総集編』(IRVING 先生)

The sheer simplicity of this book is the main reason that its message of global imbalance in the World today is presented with both clarity and force. Although the actual statistics of the imaginary village may change from year to year - hopefully suggesting a reduction in the more severe imbalances - the format is timeless, and the message always easy to comprehend. Available freely on the internet, and in many different languages, this book is a 'must read' for anyone with an interest in population problems in the modern World.

45. サイド, エドワード・W. 『知識人とは何か』(性川先生)

本学部で多様な知を学ぶみなさんは、「知識人」として卒業を迎えることでしょう。ただし、知識を身に付けただけでは知識人と呼ばれません。弱い少数者側に常に立ち、そうした人々の苦しみを取り除くために発信し続けること。そのため、政府や大企業、マスメディアといった権力から離れ、アウトサイダーかつアマチュアであり続けること。弱者の声を表現することに生きた著者から、この困難な道に向かう勇気をもらうことができます。

46. 津田 敏秀『医学と仮説—原因と結果の科学を考える』(大村先生)

疫学を専門とする著者は、医学の場面において実験的手法の導入には限界があり、疫学データから得られた科学的な因果推論が重要であることを強調する。こうした主張は、社会科学に関心を持つ読者にとって、かなり示唆に富むものではないだろうか。本書では、病因の特定に際して、実験的手法や要素還元主義的な手法に依存することで生じた過誤の例が、いくつかが挙げられる。冒頭に紹介されている、ピロリ菌と胃がんの実験研究などは、治験の名のもとに多くの被験者の健康が害された典型例であったという。医学を専門としない読者にとっても、興味深い事例から、データ分析のエッセンスをうまく汲みとってもらえるのではないだろうか。

47. 林 望『文章の品格』(園田先生)

「読書はちょっと…」苦手な学生さんにお薦めの、読みやすい一冊です。書き言葉と話し言葉との繋がりについて説明も具体的で、皆さんが社会人として身につけるべき日本語を見直すきっかけになるかもしれません。国語の教科書を離れて久しぶりに(あるいは初めて)、日本の古典に目を通したくなるかもし

れません。今後さらに外国語の上達を目指すには、まず母語の基本的な能力を磨くことが大切である、と実感できることでしょう。

48. 森 博嗣『科学的とはどういう意味か』(宮川先生)

現代社会は科学を礎として成り立っています。それでは科学とは、あるいは科学的とは、何を意味するのでしょうか。この本には、その答えが、文系・理系という呼称など、私たちが受けている(受けてきた)教育などに触れながら、書かれています。日常生活で遭遇する様々な事柄が例示されているので、自身を振り返りながら読んで、色々なことを考えてみてほしいと思います。思考停止に陥らないための示唆に富んだ一冊です。

49. 高野 秀行『謎の独立国家ソマリランド—そして海賊国家プントランドと南部ソマリア』(編集委員会)

ソマリランドは、著者自身が「北斗の拳」状態という首都モガディシオをかかえるソマリアのなかに位置している。そして、海賊があらわれる海域に面している。なぜソマリランドは、そのような環境のもとにあって平和をたもっているのか、という謎(puzzle)を抱き、著者はソマリランドにおもむく。旅行記のかたちをとって、ソマリランドの謎に迫る語り口は軽妙でありながら、その洞察は、政治学や経済学の観点からも興味深いものであふれている。学生の皆さんには、旅行記・冒険紀として読んでもらうのもよく、フィールドへの誘いとして見てもらってもいいだろう。そして何より、現場での実体験を、鋭い観察眼から書き起こしていく力に、多くを学んでもらいたい。

50. ホール, エドワード・T. 『かくれた次元』(客野先生)

“他人の距離”や“恋人の距離”、“友人の距離”、雑誌などで目にすることが多い話題だと思う。この理論はパーソナルスペース理論と呼ばれるが、これを世に広めたのはこの書籍である。著者は、動物はそれぞれの“領域”を有していて、その領域を侵害されると攻撃的行動にでたり、逃避的行動にでることを指摘している。そして同じような「領域性」が人間にも備えられていることを指摘している。翻訳者の日高先生は動物行動学の第一人者で、生物に関する蘊蓄も豊富で、多くの業績をあげておられる。この書籍は、自然環境について学ぶものにとってはもちろん、空間の計画に携わるものにとっても必読書のひとつである。

5.1. 山我 哲雄『キリスト教入門』（村瀬先生）

世界人口の約三分の一を擁するキリスト教についての知識と理解は、世界の人々（とくに欧米人）と渡り合っていく上で必要な教養であろう。一般向けのキリスト教入門書は多いが、本書は、内容の質と範囲の広さと読みやすさにおいて際立っている。旧約聖書学者として活躍する著者によるもので、2000年の歴史と世界的な広がりをもつキリスト教の信仰内容、歴史的発展、現代の姿とそこにある多様性がコンパクトにまとめられている。

5.2. アンダーソン、ベネディクト『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』（斎藤先生）

われわれが、昔からある普遍的な概念と理解しがちな「国家」、「国民」なるものは、実はそれほど古いものではない。著者は、「国民はイメージとして心の中に想像されたもの」であり、「この限られた想像力の産物のために、過去二世紀にわたり数千、数百万の人々が、殺し合い、あるいはみずからすすんで死んでいった」と述べる。本書はどのようにして、この想像の共同体である国家概念が成立したのかを論じた現代の古典。国際紛争を理解する上でも、新しい視点が得られるだろう。

5.3. 鷲田 清一【著】・鈴木 理策【写真】『京都の平熱—哲学者の都市案内』（角野先生）

〈聖〉〈性〉〈学〉〈遊〉が入れ子になって都市の記憶を溜めこんだ路線、市バス 206 号のルートに沿って自然体の京都を徘徊する。家元とお寺と京料理についてはいっさい触れない。ステレオタイプの京都論の際（きわ）にぽっかりと口を開ける孔のなかの京都を、ここで生まれ育った哲学者が案内する。ペンヤミンがいう「遊歩者（フラヌール）」を彷彿とさせる本書は「まち歩き」の入門書でもあり、専門書でもある。

5.4. 増田 寛也『地方消滅—東京一極集中が招く人口急減』（長谷川先生）

日本は 2008 年をピークに人口減少社会に突入した。これは若者が子育て環境の悪い東京圏に移動しつづけた結果であり、このままでは 896 の地方自治体が消滅しかねない。この状況を回避するためには、流出する人口に対してダム機能を果たす中核都市への「選択と集中」戦略が不可欠である。果たしてそうか？本書を読み終えた後、山下祐介『地方消滅の罟』（ちくま新書, 2014）. を手掛かりに考えて欲しい。

5.5. 日端 康雄『都市計画の世界史』（山根先生）

総合政策学部では、さまざまな領域の政策的課題について考えていくために、多くの知識を学んでいるが、少々手薄と感じているのは歴史の分野である。人類がどのような歴史を経て現在の社会を築いてきたかを知ることは、近視眼的で拙速な政策立案を防ぐために当然必要な知識、素養であろう。本書は都市計画の歴史を概説した入門書である。都市は人々の社会生活を支え保証する物理的環境であるが、一方で都市はそれぞれの時代の社会、制度、文化、経済、技術を目に見える形で空間化した時代の記憶装置でもある。さまざまな政策は都市という環境と不可分に結びついてきたし、これからもそうであろう。そのような意味で人類が築きあげてきた都市の計画

思想を知ること、政策を議論する者にとっても大変重要な意味を持つのである。

56. 久繁 哲之介『日本版スローシティー 地域固有の文化・風土を活かすまちづくり』(清水先生)

スローフード、スローライフなど現代の生活スタイルを表す言葉があるが、その流れに沿って都市のあり方を指しているのがスローシティである。本書ではこれを「地域固有の文化・風土を活かす都市」として、これまでとの違いやスローシティが必要な理由を指摘している。そして日本において、それを実現するための提案がされている。成熟した都市とは居心地がよさそうだな、と感じられる一冊である。

57. シーリグ、ティナ『未来を発明するためにいまできること—スタンフォード大学集論講義〈2〉』(伊佐田先生)

あなたがクリエイティブでありたい、イノベティブでありたいと考えているなら、ぜひこの本を手にとって下さい。イノベーションの専門家であるティナ・シーリグが、個人やチームにおいてどのようにクリエイティブが発揮され、イノベーションが引き起こされるのかを様々なケースで語ります。日常的に実践できる手法があなたのクリエイティブ性を引き出してくれることでしょう。さあ、あなたの創造性の翼を解放しましょう。

58. 宇沢 弘文『自動車の社会的費用』(西立野先生)

本書は1974年に出版され、当時の日本社会に対し、自動車の無制限な増大が市民の基本的権利を著しく侵害していると警鐘を鳴らし、大きな反響を呼びました。著者は本書を通して、自動車の運転費用が低すぎるのが問題の根源であり、社会的費用の内部化が必要と訴えました。本書は、自動車普及による社会的費用を明らかにすると同時に、市場経済の限界を鋭く描写した名著です。

59. シーサラー、シェリー『「悪意の情報」を見破る方法—ニセ科学、デタラメな統計結果、間違った学説に振り回されないためのリテラシー講座』(山中先生)

「批判的にメディアを読むことは創造性を高める」というのは、メディア・リテラシーの重要なコンセプトの1つだ。しかし、ではどのようにすれば「批判的」にメディアを読めるかは、メディア論の中から導くことができない。その手がかりの1つとして、社会に氾濫する情報を見極める力を与えてくれるのが本書だ。昨今、歴史の書き換えや擬似科学がメディアに氾濫し、社会を揺るがしている。「この道しかない」と煽られて泥沼にはまる前に、悪意の情報を見極める力を身につけてもらいたい。

60. カーソン、レイチェル『沈黙の春(改版)』(関根先生)

著者は問う。「アメリカでは、春がきても自然は黙りこくっている。そんな町や村がいっぱいある。いったいなぜなのか」。本書は、有害化学物質による自然異変に警告を発し、社会に大きな衝撃を与えた。その問題提起はやがて政治の世界を動かす。著者は念じる。「私たちは、いまや分かれ道にいる。長いあいだ旅をしてきた道…のいきつく先は、禍であり破滅だ」と。自然破壊に警鐘を鳴らした先駆書の感性は鋭く文学的ですからある。

61. 志賀 直哉『小僧の神様／城の崎にて(改版)』(関根先生)

本書は志賀の短編18作を収める。いずれも今から100年程前の大正時代に執筆されたもので、当時の、あるいは明治晩年の時代背景と、その時代の人々の生きざまが描写されている。「小僧の神様」では、神田の秤屋に丁稚奉公する仙吉がふとしたことから鮎屋でたらふく鮎を平らげた体験が、曇りのない少年の眼を通して語られ、「城の崎にて」では、電車事故に遭って九死一生を得た筆者が、城の崎で偶然に目撃した生きもの三つの死—それは蜂の自然死とネズミの殺害死とイモリの

事故死一を通じて、死の現実と意味を掘り下げる。短編の名手である志賀の文章は、簡潔に研ぎ澄まされていて、文章にはむだが一切ない。本書は文章読本でもある。

62. 港 千尋『パリを歩く』(八木先生)

グーグルの「地図」は衛生写真、航空写真、地上写真等から、多元的情報として大変重要な情報体である。要は、その場所に行かなくても、ストリートビューで擬似的歩行体験は出来る優れた情報媒体である。しかし、その場所に留まることによってしか感じる事が出来ない事がある。本書は長年パリを拠点とした写真家・批評家の目を通して「パリ」の具体的な場について語られている。この一冊を持って、本気でパリを歩き回ってみよう。

63. Brown, Lester R.『プランB 4.0 人類文明を救うために(原書)“Plan B 4.0: Mobilizing to Save Civilization (Plan B) (Revised)”』(SRINIVAS 先生)

As fossil fuel prices rise, oil insecurity deepens, and concerns about climate change cast a shadow over the future of coal, a new energy economy is emerging. Wind, solar, and geothermal energy are replacing oil, coal, and natural gas, at a pace and on a scale we could not have imagined even a year ago. For the first time since the Industrial Revolution, we have begun investing in energy sources that can last forever. Plan B 4.0 explores both the nature of this transition to a new energy economy and how it will affect our daily lives.

64. 丸山 真男『日本の思想』(坂口先生)

本書は1961年に出版されたものだが、まったく色あせていない。一心情で動き、議論しようとする日本人。タコツボ型の縦割り社会に安住する日本人。「である」にとどまり「すること」をしない日本人。—いまだ我々は丸山の指摘する「日本人」のままではないだろう

うか。日本において丸山が言い続けた「永久革命=不断の民主化」は果たして可能なのだろうか。「現代」を生きる諸君にぜひとも読んでほしい一冊である。

65. 井上 真『躍動するフィールドワーク—研究と実践をつなぐ』(小西先生)

地域研究、地域開発、環境政策、国際協力など多様なフィールドワークに携わる大学院生や専門家達の、現場での葛藤や試行錯誤で挑む等身大の姿が生き生きと描写されている。フィールドワークの厳しさや魅力を新たに気づかせてくれる書である。更に理解を深めるための参考文献や資料も多く掲載されており、学生だけでなく、実践活動や現場から学ぶフィールドワークを重視する研究者や社会人にとっても大いに参考となる。

66. ユヌス, ムハマド『ソーシャル・ビジネス革命—世界の課題を解決する新たな経済システム』(小池先生)

筆者のムハマド・ユヌス氏は貧困問題に正面から取り組み、農村の女性に無担保で資金を貸し付ける仕組みを考え出し、それを世界に広げた人物である。ノーベル平和賞を受けたのは、貧困問題の解決こそが紛争をなくすことにつながるからであろう。ビジネスの力による社会問題解決を第一の目的とするのが、ソーシャル・ビジネスである。自身の体験をもとにした本書は具体的であり、この分野に関心を持つ人々の参考になるであろう。ユヌス氏はかつて本学で講演し、聴衆に感動を与えた。

67. クロード, レヴィ=ストロース『野生の思考』(中野先生)

みなさんが中学・高校で学んできた知識の大部分は西欧の科学的思考法に基づいて経験世界が体系化されたものだった。しかし、「科学的思考」だけが唯一の思考構造ではない。文化人類学研究の成果としてこれを指摘するのがレヴィ・ストロースだ。地球上には長大な時間を費やして「器用仕事」によって構造

化されてきた「野生の」思考構造が他にもたくさん存在する。そこには後発も先進もない。異文化理解がここから始まる。

68. 服部 正也『ルワンダ中央銀行総裁日記 (増補版)』(高畑先生)

フィールド・ワークとは何か? 1960年代、故服部正也氏は「アフリカの小国の中央銀行総裁を勤めないか」との突然のオファーに、予備知識もなく赴任します。そこでの孤軍奮闘、欧米銀行関係者が実状に無知なことに気づき、経済を動かすインド系商人と交渉し、民族対立も知る。幾多の困難を乗り越えた6年間を記した本書は優れたフィールド・ワークの記録です。国際に興味がある方は「戦に勝つのは兵の強さであり、戦に負けるのは将の弱さである」と結ぶ本書を是非お読み下さい。

69. 鶴見 良行『バナナと日本人—フィリピン農園と食卓のあいだ』(編集委員会)

最近、フェアトレードという言葉が流行っている。すなわち、農作物や工業製品を輸入する際に、現地の労働者の人権が守られているのか、現地の環境に考慮した栽培方法がとられているのか、このような要件を満たしたものを取引しようという考え方である。バナナもその対象の一つである。我々が食卓で、バナナを食べることの裏で、途上国で何が起きているのか。そして途上国の労働環境の改善や環境改善に我々には何ができるのか。このような問を頭に持ちながら読んでほしい。20年以上前に書かれた書籍であるが、十分に現在でも通用する。国際貢献を目指す学生にはぜひ読んでいただきたい書籍の一つである。

70. ストロガッツ, スティーヴン『SYN C なぜ自然はシンクロしたがるのか—“数理を愉しむ”シリーズ』(山田先生)

「わかることって楽しい!」っていう気分を教えてください本です。魚の群れが優雅なぐねり運動を見せたり、鳥たちが群れをなして飛んでいく、集団としては意識をもたないはず

なのに、なぜか「同期」し、美しい模様を織りなしていく。それが本書の対象とする「Sync」です。アインシュタインやブライアン・ジョゼフソンから社会心理学者のスタンリー・ミルグラムなどさまざまな分野の科学者たちがこの「同期」という現象に取り組みました。「同期」という現象に魅せられた20世紀を代表する科学者たちの姿が、たっぷりに描かれているのも、本書の魅力となっています。

71. 上山 春平『照葉樹林文化—日本文化の深層』(編集委員会)

日本人が慣れ親しんでいる食文化、居住文化などの根源を、日本や東アジア諸国の典型的な森林タイプのひとつである照葉樹林に求めた論考である。長い歴史の中で我々は森林の資源に依存しながら生きてきた。また、里山という形で積極的に森林と関わりながら、その恵みを受けて生活してきた。その生活の蓄積の上に成立した文化が森林のタイプの影響を受けていると考えることは当然の帰結かもしれない。環境にやさしい暮らし、環境共生型のライフスタイルを探るにあたり、日本人の生活の根底にある文化のルーツを探ってみることは意義深いことであろう。

72. 外山 滋比古『思考の整理学』(編集委員会)

タイトルに「学」という文字がついているので、一見難しいようにみえるが、軽妙な語り口でかかれたエッセーであるので、とても読みやすい。しかしその内容は重要な本質に触れている。「思考」である。本書にもあるが「なぜと問う姿勢」がギリシャ文明をつくりあげた。また、思考する事は優秀なコンピュータにもできない人間の特技の一つである。この本には、朝型人間になるべしとか、アイデアは少し熟成期間ととるべしなど、優れた思考をするための、極めて具体的な方法論が紹介されている。一度手に取ってほしい本の一つである。

73. デカルト、ルネ『方法序説』（編集委員会）

あなたは卒論などの大きな課題に向かうとき、あるいは社会にでてから大きなプロジェクトをまかされた時、その問題にどのようにアプローチするだろうか。人生を過ごしていると、仕事や勉強だけでなく、様々な局面で色々な課題にぶちあたると思う。その時にどうすればよいのか。この問いに明確に答えてくれるのが本著である。デカルトはあまりにも有名な哲学者であり、また本書は有名な哲学書であるので、敷居が高いかもしれない。しかし、哲学書と気負わずに、かつての知の巨人から後世の我々へのプレゼントと思い、手に取ってみるとよい。目から鱗が落ちるかもしれない。

74. 長沼 伸一郎『物理数学の直観的方法—理工系で学ぶ数学「難所突破」の特効薬（普及版）』（編集委員会）

大学の授業で数学が出てくる事も少なくないと思う。行列、ベクトル、テイラー展開など、これらが一体何の役に立つのか、そしてこれらの数式は具体的に何を意味しているのか。これをわからないまま単なる「手続き」として頭に叩き込むのはいささか骨の折れる作業である。本書は、これらの問題に明快に答えてくれる。すなわち、いくつかの数学の要素を取り上げ、それが具体的に何を意味しているのか、「直感的に」理解できるように解説されている。もちろん、物理分野以外の者にも役に立つので、一度手に取ってみるとよいであろう。

75. 松永 勝彦『森が消えれば海も死ぬ—陸と海を結ぶ生態学（第2版）』（編集委員会）

「森と海はつながっている」。よく耳にする言説であるが、実際にどのようなつながりがあるのかという事については、知らない人も多いと思う。この本は、海と森のつながりについて、生態学の視点から明快にわかりやすく解説した書籍である。自然環境、環境政策

を学ぶものにとって、環境の諸要素がどのようにつながっているのか、特に自然生態系の連続性を理解していることはとても重要なことであり、本書はそれを学ぶための入り口となる良書である。

76. 小林 康夫・山本 泰『教養のためのブックガイド』（編集委員会）

教養とは何か、本を読むとはどういう営みなのか、そして人間とはどのような存在か。こうした根本的な問いにふれながら、読者を「本」というメディアを通して無数の他者と結ばれる「旅」に誘う。その旅は、世界各地に出ていって様々な人や出来事と出逢う旅と同じほどに、あなたを人として豊かにするのだ。本書を、普段あまり本を読まない人や、読書を苦手を感じる人に特に勧めたい。きっと、読書や図書館に対する見方が変わるから。

77. 井上 順孝『要点解説 90分でわかる！ビジネスマンのための「世界の宗教」超入門』（編集委員会）

本書は、日本の宗教についての解説から始まり、世界の主な宗教の基礎と信仰者たちの暮らし方などを横断的に論じるものである。慣習やタブー、そして祭りなど、信仰をもつ人々の生活面に着目した内容が豊富で、実際に異文化・異宗教の人々と出会う際に活かせる知識を得ることができる。自他の文化や宗教に関する基本的理解の必要性が、ますます認識されるようになっていく今日、ぜひ手に取っていただきたい一冊である。

78. 清水 義晴・小山 直『変革は、弱いところ、小さいところ、遠いところから』（編集委員会）

全国各地での、まちづくりの活動の様子と試行錯誤から得た洞察が綴られている。浦河べてるの家（北海道にある社会福祉法人）の理念に影響を受けた清水氏の実践は独創性が高く、日本社会の閉塞状況を打ち破る力を秘めた新しい実践が、「辺境」から始まっていることを感じさせる。また、「まちづくり」が実

に多義的であることも教えられる。ぜひ、本書が伝える「ちょっと変わった」目線の地域社会観、人間観・人生観・に出会ってみてほしい。

79. 井筒 俊彦『イスラーム文化—その根柢にあるもの』（編集委員会）

イスラーム（イスラム教）研究の第一人者が、イスラーム信仰とその共同体・社会形成のダイナミズムを平易に語る名著である。「イスラーム」という言葉は、日本では、不安定な社会情勢や緊張関係、暴力沙汰との関わりで言及・報道されることが多いが、私たちはイスラーム文化の多層的多元的な実態をどれほど理解できているだろうか。国内外を問わずイスラーム圏の人々との共生が不可避の課題になっている今こそ一読を勧めたい。

80. 岩田 靖夫『よく生きる』（編集委員会）

古代から、多様な形で人類が問い続けてきた「よく生きるとは？」という問いをめぐる、古今東西の哲学、宗教、文学を参照しつつ考察してゆく。「よく」生きるには他者との真の交わりが必要であり、その交わりは、「強さ」よりも人として共有している「弱さ」や「苦」を介して築かれると著者は言う。長年の西洋哲学研究に裏打ちされた著者の議論は、自己形成と人間関係、そして人と人の共生について考えるための多くのヒントを与えてくれる。

81. スティーガー、マンフレッド・B.『グローバルリゼーション（新版）』（編集委員会）

「グローバルリゼーション」や「グローバルリズム」という用語は、様々な分野や文脈で頻繁に用いられているが、これらの定義や意味の違いについて理解があいまいな人が多いのではないだろうか。本書は、経済、政治、文化、エコロジー、イデオロギーにわたる多元的な社会的過程としてグローバルリゼーションをとらえ、この壮大な出来事を平易な言葉で解説するものである。訳者による優れた補論も、本書の理解を大いに助けるものとなつて

いる。

82. 山岸 俊男『日本の「安心」はなぜ、消えたのか—社会心理学から見た現代日本の問題点』（編集委員会）

「日本人は和を重んじる」「集団主義である」「謙虚である」などの一般的な日本人論を、実証的に次々と覆しながら、「安心」と「信頼」をキーワードとして日本社会の諸問題を読み解く。著者によれば、誰か・何かをあえて「信頼」する必要もなく「安心」して生きられるかつての社会は崩壊した。この不確実性の時代に求められるのは「信頼社会」である。現代日本において何が問題になっているのかわかり、考える一助となる刺激的な論考である。

83. 城山 三郎『落日燃ゆ（改版）』（編集委員会）

広田弘毅という人をご存知だろうか。内閣総理大臣を一度、外務大臣を三度務め、日本を太平洋戦争へ導いた罪で靖国神社に祀られている人物である。

彼は一貫して戦争に反対していた。しかし「文民の誰かが殺されねばならぬとしたら、ぼくがその役をになわねばなるまいね。」と、文民としてただ一人、絞首台に上った。

日本がなぜ戦争に向かったのか、なぜ止めることができなかったのか。靖国問題、外交政策にも多くの示唆を与える一冊である。

84. 本多 勝一『中学生からの作文技術』（編集委員会）

（例1）私は小林が中村が鈴木が死んだ現場にいたと証言したのかと思った。

（例2）鈴木が死んだ現場に中村がいたと小林が証言したのかと私は思った。

同じことを言っている、例1は読みにくく例2は読みやすい。なぜか？ 理由を知りたい方はご一読を。

85. セン、アマルティア『人間の安全保障』（編集委員会）

著者アマルティア・センは1998年にノーベ

ル経済学賞を受賞した経済学者であると同時に、ケンブリッジ大学時代には哲学教授も勤めた人物。彼の関心は貧困や不平等にあり、効率性の話に偏りがちな経済学研究に対して分配の公正について厳密な議論を展開した。この『人間の安全保障』は8本の小論で構成されており、「人間の安全保障」という概念についてわかりやすい説明が施される。国際政策学科への進学を目指す人には必読の書。

86. NHK「東海村臨界事故」取材班『朽ちていった命—被曝治療 83日間の記録』（編集委員会）

皆さんは放射線を浴びて命を落とすとはどういうことなのか、考えたことがあるだろうか。浴びた途端に即死するのだろうか。それとも癌が次々と転移するのだろうか。本書では1999年9月の臨界事故患者の治療記録を通じて、その経緯が詳細に記述されている。分量は多くないが、強く重く心に訴えるものがある。読書から学ぶとはこういうことかと理解できる良書。

87. 沢木 耕太郎『深夜特急〈1〉香港・マカオ』（編集委員会）

ちょっと長めですが普通の旅行小説、旅日記です。ただ非常に「毒性」が強く、読むと仕事も勉強も放り出して旅に出たくなります。読むならできるだけ早く、できれば学部1年生の前期に読んでください。大学生活がちよっと違ってくるはず。一方、4年生は絶対に読まないでください。内定辞退、彼氏・彼女が邪魔になる等の症状がでるかもしれず、危険です。

88. カー, E. H.『歴史とは何か』（編集委員会）

徳川家康でも豊臣秀吉でも、ナポレオン皇帝でもよい、歴史上の人物を考えてみよう。彼らについて書かれていることは、本当に事実なのか。いろいろ書かれていることの、どこに真実があるのか。そもそも「事実」とは何なのか。こうした疑問に、筆者は丁寧に

答えてくれる。筆者は歴史家だが、その指摘は、多くの学問分野に参考になりそうだ。難解なところもあるが、何度も読むうちに筆者の思いが伝わってくるであろう。本書はケンブリッジ大学での講演がもとになっている。その翻訳の素晴らしさも味わってもらいたい。

89. 土居 健郎『「甘え」の構造（増補普及版）』（編集委員会）

新渡戸稲造『武士道』、ルース・ベネディクト『菊の刀』、丸山真男『日本の思想』に並ぶ日本文化論の名著。著者は精神科医であり、その経験から、「甘え」という言葉の適切な訳語がヨーロッパ言語に存在しないことを知る。国民性はその言語に反映しているはずだという発想から、日本的な思考方法—義理と人情・個人と集団・内と外などを「甘え」を切り口に分析する。加えて、現代社会の急速な変化は人々に「社会からの疎外感」を与えており、近年では世界的な「甘え」への渴望が生じていると論じる。

90. コリアー, ポール『最底辺の10億人—最も貧しい国々のために本当にすべきことは何か？』（編集委員会）

BRICs（ブラジル、ロシア、インド、中国）などの発展途上国が貿易、金融、投資などのあらゆる分野で世界経済をリードする一方で、最貧国から抜け出せない国々がある。それらの国々に住む約10億人の人々は、4つの「開発の罌」（紛争、資源、地理、統治）によって経済成長の機会を奪われ、今も貧しい生活に追いやられているという。本書は、最貧国が最貧国のままである理由と、それらの国々が罌から抜け出すための解決策を同時に知ることができる刺激的な良書である。

91. ローゼンブルース, フランシス・ティース, マイケル『日本政治の大転換—「鉄とコメの同盟」から日本型自由主義へ』（編集委員会）

日本の政治の近現代史についてもっと学びたい、と思いながらも、どの本を手にとった

らよいか分からないという人は意外と多いのではないだろうか。本書は、アメリカの大学で長く日本政治研究にたずさわってきた著者らが、「合理的選択」の観点から江戸時代以降の日本の統治を分析したものである。そのなかでは、経済政策を決めるのは政治であり、その政治を決めるのは政治制度であることが強調される。よって究極的に、日本の経済政策の変化を説明する要因は、選挙制度を始めとする政治制度に求められることが繰り返し主張されている。果たしてそれは、読者のみなさんの直観に沿うものだろうか。是非とも、手にとって、考えながら読み進めてもらいたい1冊である。

92. 坂元 一哉『日米同盟の絆—安保条約と相互性の模索』（編集委員会）

集団的自衛権の解釈の変更など、日本の安全保障は大きな変化の時期にある。戦後の日本外交にとって、アメリカとの安全保障関係は集団的自衛権の問題と対をなすものであった。著者は、日本とアメリカの同盟関係は「物とヒトとの協力」により、不平等な面をはらむものであり、その均等性を獲得しようという力が、両国関係を導いてきたのだと主張する。集団的自衛権の解釈変更といった変化も、そうした本書の主張をもとにして解釈してみるとわかりやすいかもしれない。いま改めて手に取り、これからの日本の安全保障政策を検討する上での一助としたい1冊である。

93. 森 博嗣『喜嶋先生の静かな世界—The Silent World of Dr. Kishima』（編集委員会）

「研究」って何なんでしょう？「大学」って何なんでしょう？「研究者」「大学教授」って、高校までの先生と何が違うんでしょう？この本、ただの小説なんですけど、とってもよく描写しています。読んで教養が身につくとか、誰かに自慢できるとかいった本ではないけれど、社会人になったときに読み返して自分を取り戻すのにいいんじゃないかと思います。なお、私は「喜嶋先生」にはなれなかったし「橋場君」と同じようになってしまっ

たけれど、「喜嶋先生」が活躍する大学を作りたいと思っています。

94. 夏目 漱石『三四郎（改版）』（編集委員会）

かつて大学は未知の世界への招待であり、新入生は「美しき惑いの年」を過ごしました。そんな心の揺れを、夏目漱石は『三四郎』に結晶させました。明治末に「田舎の高等学校を卒業して、東京の大学にはいった三四郎が新しい空気にふれる。そうして同輩だの先輩だの若い女だのに接触していろいろに動いてくる」（漱石による予告文）。あわせて、ウェブスターの『あしながおじさん』、ゴリーキーの『私の大学』もおすすめです。

95. 戸田山 和久『論文の教室—レポートから卒論まで（新版）』（編集委員会）

1年生にとってレポートとか論文の意味はよくわからないと思います。お配りした『基礎演習ハンドブック』に簡単な説明がありますが、やっぱりよくわからない、という人が大半でしょう。本書は『ハンドブック』より細かくレポート・論文について説明されています。読んでおけば、残りの大学生活の意味も変わってくると思いますよ。

96. 飯尾 潤『日本の統治構造—官僚内閣制から議院内閣制へ』（編集委員会）

政治や行政の在り方について分析、解説、提言の類は多いが、本書ほど広い層にインパクトを与えるものは少ないのではないか。「官僚内閣制」から真の議院内閣制へ——が筆者のメッセージである。それが説得力を持つのは政治学の理論と歴史、そして現実の政治過程についての豊富な知識に支えられているからであろう。政治や政府に関心を持つ人には必読と言える。国際比較の視点もあり、さまざまな角度から読めるであろう。政治や行政に関する「常識」は筆者によって、簡単に覆されてしまう。その知的挑戦には学ぶべきところが多い。

97. ジード, アンドレ『狭き門(改版)』(編集委員会)

キリスト教の伝統に従えば、真実の愛とは自分本位と自己満足の愛ではなく、愛する人(々)のための自己犠牲的な愛である。しかし、自己犠牲的な美しい愛は、純化されるとともに愛そのものを犠牲にしてしまう—そのようなせつない悲恋の物語をとおして、ジッドはジェロームとアリサの心の微妙な揺らぎを描きだす。私たち現代人は映像作品によって行動の連鎖をリアルに見ることができるようになった半面、心の細やかな流れを思いやる感受性を失いつつある。吟味された言語表現による内的経験の豊かさを再発見するために本書を推薦します。

98. エンデ, ミハヤエル『はてしない物語(上・下)』(編集委員会)

私たち現代人は、さまざまな商品や人間を欲望の対象とみなし、手に入れようとする。私たちの心はばらばらに個々の対象に向かい、無数の要求のうちへと自己分裂する。これにたいして、何の関係もなさそうなものや人をつなぎ合わせて一つの意味ある世界を生み出す人間の営みが物語である。物語こそは、学問研究(ことに総合政策学部)においても重要な総合能力のエネルギーを供給する。いじめられっ子バスタアンがその物語能力によって崩壊しかけたファンタジーエン国の女王に新しい世界をプレゼントし、自分自身も成長して行く大スケールの『はてしない物語』はまた、人間の成長の道筋を描く壮大な物語である。

99. クロポトキン, ピョートル『相互扶助論(増補修訂版 同時)』(編集委員会)

ダーウィンの影響を受けた社会進化論は、19世紀後半の適者生存の思想に基づく格差社会や人種差別を結果的に肯定・擁護し、ナチズムという鬼子まで生みだした。しかし同じ時期、同じダーウィンの理論を用いながら、適者生存とはまったく異なる相互扶助の思想

を掲げた代表的思想家がクロポトキンである。人類に相互扶助の意識が芽ばえ、社会的存在となることで生存能力が増し、大きな進歩をあげることができたことを強調する。自己中心的な傾向が人びとを孤独にし、人間環境だけではなく自然環境までも破壊するようになった現代こそ、本著から学ぶべきところが多いだろう。

100. 中島 義道『反〈絆〉論』(編集委員会)

〈絆〉という言葉は東日本大震災以来、耳にする者は直ちにその前にひれ伏す絶対的な権威をもったすばらしい思想だと思われている。しかしそのうるわしい言葉には恐るべき暴力的な意図が含まれている。〈絆〉賛美の大合唱は、平板な「みんな一緒主義」に終わる危険もある。ひとは共に生き、支え合うことができるためには、他人に無限に甘えるのではなく、孤独に耐え、自分と向かい合うこともできなければならない。どんなに美しく響くものであっても、時には冷徹な目で批判的検討を加えることによって、ほんとうの〈絆〉の意味も見えてくるだろう。

この『100冊』が皆さんの人生の一助となることを祈念して。

2015年4月
『新・総合政策学部の100冊』編集委員会
鎌田康男
客野尚志
村瀬義史
亀田啓悟
大村華子(委員長)
